

地域情報（県別）

【東京】「目指すは日本唯一の小児科」14職種が連携し短期入所施設も運営-本田真美・みくりキッズくりにつく院長に聞く◆Vol.1

医療資格者「さほどリクルート活動をせずに来てくれる」

2022年11月25日（金）配信 m3.com地域版

「日本一よりも日本唯一の小児科をつくりたい」――。「みくりキッズくりにつく」（世田谷区）の本田真美院長は、こんな思いを胸に2016年の開院から事業展開し、現在その姿は全国的にもユニークなものに見える。14職種83人が在籍して土曜日と日曜日も診療し、一般小児だけでなく専門外来と医療的ケア児向けの短期入所施設を運営。まずは、グループの概要と事業展開の背景を聞いた。（2022年10月21日インタビュー、計3回連載の1回目）

▼第2回はこちら

▼第3回はこちら



本田真美氏（クリニック提供）

――みくりキッズくりにつくは、一般的な小児科よりも広く医療・サービスを提供している印象を受けます。まずは概要をお聞かせください。

当院は2016年、世田谷区の上野毛駅、二子玉川駅から徒歩5～10分の場所に開院しました。患者さんに多くの選択肢を提供したいと、一般小児だけでなく「発達サポート外来」を運営し、医療的ケア児を対象とした日中ショートステイ施設「まんまる」を備えています。2019年に開所したまんまるは、クリニックに併設する医療型特定短期入所施設としては都内初です。お子さんの日中預かり事業としてはこのほか、世田谷区から依頼を受けて区民向けの「ぼれぼれ」も行っています。

私たちは提供する医療・サービスの多角化を進めており、現在は医療法人社団と一般社団法人、株式会社で構成するグループ全体で取り組んでいます。医療法人社団「のびた」は本院と狛江市にある分院の「コドモノいっぽクリニック」を運営。一般社団法人はお子さんの学びの場をつくろうと「みくりエイティブ」と題して定期的にワークショップを開き、株式会社「琉球マインド」は訪問看護リハビリステーション「七つの海」を持ちます。また、発達サポート外来で行っている保険適用下でのリハビリに限界を感じてきたことから、株式会社では自費に特化したリハビリも行っています。

――本院の患者数とグループのスタッフ数は。

患者数は1日200人ほどで、感染症の流行期には300人ほどに増えることもあります。スタッフは常勤53人で、非常勤を含めると83人です。このうち常勤医は私を含めて5人おり、職種は医師と看護師、事務のほか、理学療法士、作業療法士、言語聴覚士、管理栄養士、心理師、保育士、助産師など計14職種が在籍しています。中でも、常勤として

理学療法士が4人、作業療法士が5人、言語聴覚士が5人いるのは特長でしょう。これら三つの職種がこれほどの規模感で働いている小児科は少ないのではないのでしょうか。

——開業医を取材すると、「採用」を課題に挙げる人が少なくありません。中には「最も難しい」と話す人もいます。

事務の採用には苦労することがありますが、今のところ有資格者はさほどリクルート活動をせずに来てくれていますね。

多角的な展開が奏功しているのではないのでしょうか。例えば、各種セラピストの場合、勤務先は高齢者を対象とした施設が多く、小児領域は少ないのが実情です。しかし、「子どもの成長をサポートしたい」と希望する人も一定数いるため、そんな人の受け皿になれているのかなと。また、開業志望の医師がトレーニングを兼ねて働いてくれることもあります。スタッフが多くいて多職種連携できることが病院の魅力の一つだと思いますが、私たちはそれをクリニックで行っているのが興味を持ってくれるようです。

加えて、私の院外活動でクリニックを知ってくれる人もいます。私は世田谷区の教育委員会や児童相談所、保育所などで嘱託医を務めており、クリニックの外でも行政や福祉の関係者と交流しています。

——病院の特長や院長の活動が採用のマッチングにつながっていると。

そうですね。開業医の中には何らかの分野で「自院を日本一にしたい」と思う人がいるかもしれませんが、私の場合、「日本一よりも日本唯一のクリニックに成長させたい」と独自性を重視してきました。

働いているスタッフが自院を「面白い」とポジティブに思えると、仕事の質が上がり、結果的に患者さんの満足度向上につながっていくと感じています。私は对患者さんと同様、スタッフに対しても「選択肢を持たせること」が大切だと考えており、スタッフは複数の現場を経験します。医師は一般外来だけでなく発達サポート外来も担当して重症児も診る。看護師とリハビリスタッフは外来と訪問看護ステーション、短期入所施設を兼任する。こうすることで幅広くスキルアップが図られ、医療者としての自身の適性にも気付きやすいのでは。

——祝日を除いて全日診療していることも特長です。多くのスタッフがいることでこれも実現しやすいと思いました。

「休日診療こそ一番の育児支援」と考えての体制ですが、これは私が2人の子どもを持ち、仕事と子育てを両立させる大変さを感じたことが影響しています。病気は曜日を問わず起こる一方、今は共働きの世帯が多いので土曜日と日曜日に診療している医療機関があれば親御さんの選択肢を増やせますよね。

「患者ファースト」を根っこにしつつ、多職種連携と土日診療によって多くの選択肢を提供する。診療の場ではスタッフ体制を生かしてモットーである「経過観察をしない診療」を実践する。

……と、こんなふう取材に答えていると、どこか私がすごく見えるかもしれませんが、そうではありません。私はアイデアを出すことが好きですが、それを具現化して継続してくれているのはスタッフです。中でも、開業時に集まってくれた約20人のほとんどが今も残ってくれていて、各部門のリーダーとして私のビジョンを共有してくれているのが大きいですね。私は勤務医時代に医師の限界を感じ、連携の大切さを肌身に味わいました。その経験が開業医としても生きています。

◆本田 真美（ほんだ・まなみ）氏

1998年東京慈恵会医科大学卒。国立成育医療センター（現国立成育医療研究センター）や都立多摩療育園（現都立府中療育センター）、都立東部療育センターなどを経て2016年に「みくりキッズくりにつく」を開院。日本小児科学会専門医、日本小児神経学会小児神経専門医など。

【取材・文＝医療ライター庄部勇太】

